



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第26回】

「鬼義重」、六郷城に居城

1 出羽国の中央部に立地

秋田県は北の青森県、東側の岩手・宮城県、南の山形県に囲まれている。西は日本海。秋田県の主だった都市は北から大館、鹿角、能代、秋田、仙北、大仙、横手、由利本荘、湯沢といったところ。県庁所在地の秋田市は同県の中央から北西に寄った日本海に面している。中央地域は秋田市に隣接する大仙市あたり。「大曲の花火」で有名な街だ。奥羽本線の大曲駅がある。

大曲駅から奥羽本線を南へ向かうと、「飯詰」、
「後三年」の駅がある同県仙北郡美郷町に入る。「かまくら」で有名な横手市に隣接している。美郷町は平成22年(2010)、千畑、六郷の2町と仙南村が合併して誕生した。行政域でみると、美郷町は大仙市と横手市に挟まれ、岩手県和賀郡西和賀町とも接している。

美郷町を奥羽本線と並行して国道13号が通っている。かつての羽州街道である。飯詰駅近くの県道116号を車で東へ進むと、国道16号の「側清水交差点」を過ぎて広域農道へ出る。左折して少し進むと、右側に「田岡神社の鳥居が見える。下車して参道を進むと、石柱に囲まれた「通庵佐竹公館址」の石碑が建っている。「通庵」は佐竹氏19代当主義重の道号。ここが国替の時、秋田県入りをした家臣たちを仕切った義重の居城跡である。

2 小野寺氏遺臣への対応

国替を知った時、義重は隠居の身で、太田城(常陸太田市)を居城とし、「北城」様と呼ばれていた。突然の移封に家中は騒然となった。このとき、「一戦も交えぬまま家康の命に屈するのは佐竹の家名に恥じることだとする徹底抗戦を主張する意見も強かった。しかしそれは家康の思う壺だと家臣一同を説諭し、出羽移封に導いたのが義重だった」と『秋田藩』(令和元年現代書館発行)の中で著者の渡辺英夫氏は述べている。

義宣がまだ京都・伏見屋敷にいた慶長7年(1602)、義重は常陸国を離れた。『佐竹家譜』は同年6月15日条で「太田城を開て八槻に到る」と書いている。八槻(福島県東白川郡棚倉町)に集結した一行は奥羽山脈を越えて出羽国湯沢(秋田県湯沢市)に入った。湯沢から横手方面は、出羽国南部の有力武将・小野寺氏の旧領地。小野寺氏は関ヶ原合戦で西軍の上杉景勝に味方をし、徳川家康によって戦後、改易処分を受けた。

そのため、同南部地域の仙北・平鹿郡は主を失った小野寺氏遺臣で満ちていた。出羽国に入った義重一行は小野寺氏の居城・横手城(秋田県横手市)を接收し、義重は六郷城(同県仙北郡美郷町)に陣を張った。六郷城は六郷氏の居城。関ヶ原合戦で家康に味方し、戦後、常陸国の府中(茨城県石岡市)へ国替となった。隣接の本堂城(秋田県仙北郡美郷町)の本堂氏も東軍に付き、戦後、常陸国志筑(茨城県かすみがうら市)へ移封となった。改易となった小野寺氏遺臣の動きは懸念材料だった。

3 義重、不測の事態を想定

義重は佐竹勢を六郷城に結集させ、当主義宣の入部を待った。その間、宿老の和田昭為を出羽国最大の在地領主だった秋田氏(旧安藤氏)の居城、土崎湊城(秋田県秋田市)を受け取りに向かわせた。秋田氏も東軍に付いていたとされる。関ヶ原合戦後、常陸国宍戸(茨城県笠間市)に国替となった。小野寺氏も国替であったならば、義重らは土崎湊城に移動し、そこで当主を待つのが順当な対応であったろう。

しかし、義重はそうはしなかった。その理由を『秋田藩』(同)は次のように書く。「平鹿・仙北地方を軍事的空白にして佐竹勢が土崎に移動したのでは、いかに精鋭部隊とはいえ数に劣る義宣の一行がここを通過するのは危険と考えたのであろう」。平鹿・仙北地方は領地没収となった小野寺氏の旧支配地域。「精鋭部隊」とは関ヶ原合戦後、

義宣が上京した折、常陸国から連れて行った譜代の「93騎」のこと。

小野寺氏は最盛期、秋田氏に次ぐ勢力を誇っていた。主と給地を失った旧家臣たちが新たに入部してきた義宣をどうみるか。万が一にも道中で襲われるような事態が発生したら義宣はじめ佐竹氏にどのような火の粉が降りかかるか、わからない。義重は思いをめぐらし、義宣の身の安全を第一に考え、不測の事態に備え六郷城に佐竹勢を結集させた。戦国の世を生き抜いてきた義重ならではの判断だったといえるだろう。

4 重要拠点に一族を配置

義宣一行は何事もなく土崎湊城に入ることができた。『佐竹家譜』は慶長7年9月1日条で義宣以下一族らの配置を以下のように記している。「義宣秋田郡土崎湊城、義重六郷に在城。且北義廉を長野紫島城に、蘆名盛重を角館に、東義賢を増田城に、南義種を湯沢城に、多賀谷宣家を檜山城に、小場義成を比内城に、伊達盛重を横手城に居して是を守しむ」と。

義宣は湯沢城や横手城など南部地域の配置を義重が陣取っていた六郷城で行ったようだ。小野寺氏の旧領地一帯の支配体制を整えたうえで義宣は北部の土崎湊城へ入った。義宣は、秋田氏が安藤氏を名乗っていた時代の居城・檜山城（秋田県能代市）とその支配下にあった比内城（同県大館市）にも一族を配置した。こうして義宣は新領地の重要拠点に一族らを配置、国替を滞りなく実現した。

親子は一瞬のスキをみせることなく、新領地に移った。この間、関ヶ原合戦で家康に組みし、大々名に取り立てられた山形の最上義光らは佐竹氏の一挙手一投足をみていたことだろう。北関東の盟主・佐竹氏は国替という初めて経験する災難に遭っても動じなかった。源氏の名族として誇りを持ち、部門の家名に恥じない見事な対応をみせた。それを仕切ったのが「鬼義重」の異名をもつ義重であったと言っても過言ではないだろう。

5 義宣、久保田に新城

土崎湊城で一冬を過ごした義宣は明けて慶長8年（1603）5月、「新城を秋田郡久保田に築かしむ」（『佐竹家譜』）と決断した。土崎湊城

は旧領主・秋田氏の居城で、海に面して手狭であった。義重は新城候補に山に囲まれた要害の地・横手城を推したとされる。しかし、義宣は常陸時代の水戸城のように平坦地が広がる久保田の「神明山」（現在の千秋公園）を新城の地に選んだ。

慶長9年（1604）年8月28日条の『佐竹家譜』は「久保田の新城経営已に成て移り住す。秋田城と称す」とある。この間、義重は居城の六郷城下の町割りを進めていた。その最中の慶長8年10月、「仙北郡ノ残土蜂起シテ、六郷ノ義重ガ居館ヲ襲フ」（『六郷の歴史（六）』・昭和51年六郷町町史編纂委員会発行）事態が発生した。攻撃勢の数は「千余人」。大曲城などからの援軍が駆け付け、反乱軍を鎮圧した。

義重が心配していたことが起きた。読み通りであった。義重は其の後も六郷城から動かなかった。六郷城跡に建つ「通庵佐竹公館址碑」に小野寺氏の遺臣らが蜂起して押し寄せた際、領民と僧侶が「争いて起つ」と書いてある。入部間もない義重を助けるため地元民と一緒に戦ったとある。碑文は「公の邑民・忠僕を愛するに因る」と刻む。義重は慶長17年4月、同城で亡くなった。66歳。「一所懸命」に常陸国から出羽国に佐竹氏を繋いだ功績が今も碑文から伝わってくる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



六郷城跡に建つ「通庵佐竹公館址碑」
＝秋田県仙北郡美郷町六郷